



1928年に井上芳晴製紐として創業。2008年には現在の本社新社屋竣工。この津久井地域では、古くから組み紐工業が盛んに行われていた。

国内トップのシェア6割。日本でいちばん女性に愛されているヘアゴム（ヘップリング）や伝統的な組み紐製品をつくるイノウエがあるのは丹沢山地のふもと。澄んだ空気と溪谷のせせらぎが心地よい山里に、隠れたトップクラス企業はありました。

「ありつつも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜の置くまでに」

万葉集にも詠われる日本女性の黒髪の美しさ。その黒に、しっとりとした映えるカラフルなヘアゴムの数々がイノウエを訪れる人を迎えてくれ



21 Companies of unique in Sagamihara and Tama.

FILE 01

ポピュラーなソフトカラーゴムをはじめ多彩なカラーバリエーションで1000種類以上を揃える。「ヘップリングゴム」はイノウエの登録商標になっている。

ます。丹沢の山並みを望み見るシヨールームに並ぶ、おしゃれゴムの百花繚乱は、まるで紅葉のように目に鮮やか。

一度使ったら、他のヘアゴムは使えない、使いたくない。『イノウエ』は、そんな女性ファンを数多く持つ「隠れた有名ブランド」なのだとか。

経済成長の先の「おしゃれ文化」を予見したカラーヘアゴム

「みなさん最初は、こんな山あいに

特許を持つ接着技術を支えるのは“内職さん”。ほとんどがなま目がわからない高いレベルのヘアゴムに仕上げる。



と驚かれます」と、井上社長は笑います。おしゃれな女性に人気の有名雑貨店でも扱われているヘアゴムが、実は、自然豊かな地にある工場で作られていたというのは、ちょっとした驚き。

イノウエの創業は1928年。井上社長の先代が、物資を運ぶための落下傘用の紐や、雨の日に下駄履きの足袋に被せるカバーを留める紐などを製造したのが始まりでした。

もともと、この神奈川県津久井地域は、山あいの冷涼湿潤な環境を生かした組み紐生産が盛ん。当時は絹や木綿などの天然繊維を使っていた

【株式会社イノウエ】 日本一女性に愛される ヘアゴムをつくる 「しあわせな会社」

つくる人も使うもしあわせに。
ユーザーから指名買いされる、
おしゃれゴムと組み紐製品を生み出す強さの秘密

取材・文=弓手一平 / 早野寿一

DATA

会社名：株式会社 イノウエ
代表者：井上旭
所在地：神奈川県相模原市緑区鳥屋 750
TEL：042-785-0136
URL：http://www.inoue-braid.co.jp/

ため、そうした自然環境が、質のいい組み紐づくりに寄与していたそうです。

「製紐業と言いますが、仏具や着物の帯締め、刀の装具といった伝統品から包装用の紐、電気コードの被覆などの産業資材、登山用ザイルなど幅広く使われています。私が、先代の父の事業と一緒にやるようになったのは1967年。まさに日本は高度成長期で、産業用の組み紐が次々つくられていたんですね」

経済が豊かになり、人々が海外の流行にも目を向け始めた時代。そこに上陸したのがイギリスのモデル『ツイッギー』と共にやってきたミニスカート旋風でした。

「その頃、ヘアゴムの原料はつくっていたのですが、色は白と黒。おしやれとは言いがたい。せつかく日本女性の黒髪とミニスカートの美に世界が注目しているのだから、それに似合うカラフルなヘアゴムを出せば喜ばれるのではないか。そう考えて、1972年に初めて15色の紐状のヘアゴムを商品化しました」

女性向けファッション誌が相次いで創刊され、高度成長の先の文化的な豊かさを手探りしていた時代。



社長の井上旭氏。ヘアゴムへの思いと社員や内職さんへの愛情は同じ。「控え目だけど芯のある日本女性の美を応援したい」

21 Companies of unique in Sagamihara and Tama. FILE 01

【株式会社イノウエ】



自社ブランドでのヘアゴム製品だけでなく、有名雑貨ブランドなどのOEM生産の依頼も多い。中国やアメリカ市場でも、自国にはない高品質なヘアゴムの使い心地にファンが増えている。

そこに、黒髪に似合う彩り。としての提案をしたのです。

結わく文化の消滅

しかし最初は、まったく売れませんでした。今のように若い女性が集まる雑貨ブランド店もない時代。苦勞して取引先を開拓するなか、あるデパートが試験的に店頭に並べたとところ大ヒット。工場を増設しないと生産が間に合わないほど売れ、日本中に広がっていきました。

ヘアケア製品としての組み紐、カラーヘアゴムの成功。それでも、井上社長はイノウエとしてすでに次の時代に目を向けていたと言います。

「日本の文化から、縛る。結わく。といったものが消え行くのを感じていたんです。寝巻きがパジャマになり、風呂敷が紙袋になった。そのうち、紐のヘアゴムで髪を結わくということも廃れるかもしれない。それなら、最初からリング状になったヘアゴムがあればいい。逆にチャンスかもしれないと考えたんです」

一部には輪ゴムで髪を結わく人はいました。しかし輪ゴムは摩擦係

数が大きく髪を無理に引っ張って痛かったり、髪を巻き込んだりします。だからこそ、髪にやさしい組み紐が輪になったヘアゴムができれば……。ところが、話は簡単ではありません。

「日本の接着剤メーカーから、いろんな接着剤を取り寄せてもリングの接着面がうまくくっ付かないんです。ゴムが付くものは、糸が付かない。逆に糸がくっ付くものは、ゴムがダメ。そこに、アメリカから進出した接着剤メーカーを紹介してもらい、4年ほどかけて、なんとかリン

グ状ヘアゴムとして実用性に耐えるものができました」

世の中は平成になった頃。結ばなくていいヘアゴムは、たちまち市場に受け入れられていきました。

ただのものづくりはしない

「最初に、アメリカの接着剤メーカーに開発を引き受けてもらったときも、これは、単なる流行のものではなく女性の必需品になるから、とお願いしたんです。未知数の用途だったけれども、つまり、それだけ多く

の人に使われるということは、やがて競争相手が参入してくる。そのとき、ただリング状を真似た商品と、イノウエのヘアゴムは何が違うのか。そこを、しっかりと認めてもらえるようにしようと考えました」

そこで行ったのが実用新案の登録。そこから、さらに接着面の改良などを重ね、1995年にはリングゴムにおける極小面積での高い接着技術で特許も取得しました。

「とにかく、つくり手の自分たちも自信を持って、取引先やユーザーにも安心してもらえるものをつくりた

かった。でも、それは思っているだけではダメ。責任を持ってつくってほしい。という思いをカタチにしたい。そこで『ISO9001:2000』の品質保証マネジメントシステムの国際規格の認証を取得したんです」

その頃の従業員数は17名ほど。それでも、ただ単に製品としてのもをつくれればいいとは考えませんでした。どこに出しても恥ずかしくない「いいものをつくらう」。イノウエとしての方向性をそう定めたのです。



リング状に接着される前の切りそろえられた「ゴムひも」。1カ月に200万本ものヘアゴムが生産され、それらは人の手の微妙な感覚を活かして接着されヘアゴムになる。



節電志向の高まりで夏場は特に、髪を涼しくまとめるためにヘアゴム需要が急増。なでしこジャパン川澄選手のピンクのヘアバンドも実はイノウエが製造元だった。



できあがったヘアゴムは強度検査を受ける。最大5kgの引っ張り強度を実現。ISO9001 2000を取得し原料から生産工程まで一貫した品質管理を行っている。



神奈川県知事指定かながわ中小企業モデル優良工場として認定。社員がストレスなく仕事ができるように、負担のかかる作業、無駄な工程の省力化を積極的に推進。

「こんなのが欲しかった」というワクワクを 日本一たくさん

現専務である毅氏も、そうした父、井上社長の思いを感じてエンジニアリング企業を辞めて、イノウエに戻ってきました。小さな家業だった頃の厳しさを知っている毅氏にとって、それは大きな決断でした。「ただ言われるままではなく、自分たちで一から世の中に残る商品をつくられたら楽しいだろうと。そんなに儲からないかもしれないけど(笑)」

リング状ヘアゴムの商品化を成功させ、ものづくりの基本姿勢も決め、品質をマネジメントする仕組みもつくった。その結果、原料供給をする組み紐メーカーから、独自商品のあるメーカーへとステップを進めました。

「自分たちで価値をつくって、価格も決められるというのが大事です。品質に責任が持てて、しかも、こんなのが欲しかったと喜んでもらえるものをつくれれば、それが可能。そしてどうせなら、日本一になろうと。じゃあ、どの分野でなるのかというと、首から上のおしゃれ商品です。」

エンジニア出身の井上専務。常に他の分野からも、自分たちに応用できる技術がないか考えている。

21 Companies of
unique in
Sagamihara and Tama.
FILE 01
【株式会社イノウエ】



やはり女性が、人から注目されたいと感じるのは、首から上。そこに、さりげなく、でも毎日ちよつとだけでも変えたくなるような商品を提案できれば」

企業としての 軸の強さの秘密

現在も毎月約200万本ものリングゴムを出荷し、全国トップのシェアですが、数が多いから強いという考え方をしないのがイノウエの企業としての軸の確かさ。その軸を強固にしているのが、技術の追求と商品に携わる人へのこだわりです。

「ヘアゴムだから結べればいい、なんてことは論外。今は、ふつうに商品をつくっているだけでは消費者はつかめません。ものなんて、あふれている。なにか掘り下げた商品でなければいけません。そこで『エコテックス100』という繊維製品の健康への安全性を認証する世界統一規格をヘアゴム製品で初めて取得。『製品分類1』は、そのなかでもとりわけ厳しい基準で、3歳未満の乳幼児が口に含んでも大丈夫なものです。そういったものを取ろうと、従



乳幼児が口にしても安全安心な絶対的な信頼を得たい。その強い思いから健康に不安のない繊維製品を検査する国際的な試験・認証システム「エコテックス100」を取得。「製品分類1」は、とりわけ厳しい基準で、3歳未満の乳幼児用繊維製品・玩具での使用をクリアするもの。

回転する機械で何本もの原料の糸とゴムを組み込んでいくのは、遠心力と速度のバランスを取りながらの微妙な調整が必要。大切に手入れされた機械が並ぶ。



業員みんなにその過程を公開しながら、みんなの力で取りました」

ヘアゴムメーカーのなかには、商品企画を日本で行い、中国などで安く製造して大量に売るというところもあります。取引先でも、一時期、そうした中国製に切り換えたところもあったのですが、ユーザーから「ゴムが切れやすい」「使い心地が良くない」とクレームが入り、やはり品質面でイノウエのものがいいと再評価されたこともありました。

「ものを選ぶ決定権がお店から消費者に変わったことを気づかないお店は、顧客離れしていきます。どれだけユーザーのことを思ってもものづくりできるか。例えば、食品のようなトレーサビリティ、どんな原料を使って誰がどんなふうにつくったヘアゴムなのかも消費者に見せられればいいですよ」

そのために、手作業でしっかりと一本一本のヘアゴムを接着する260人の、内職さん。も、日本一のヘアゴムを自分たちがつくっているという高い意識を持っていきます。季節ごとの温度変化で微妙に変わる接着技術の研修を行うなど、イノウエの、内職さん。はプロ集団な

のが特徴。また、そうしたプロの働きに伝えるため、不良品率の達成ランキングごとの工賃をオープンに示すべてみんなに見え化。モチベーションを維持できる仕組みにもこだわっているのです。

挑戦としあわせ

組み紐技術の応用は無限。織物は単純な縦横の繊維構造のため、一カ所切れると弱くなりますが、組み紐は無数の穴が開いた斜めの繊維組織なので破断しにくい。その特性を生かし、天然アロマオイルを繊維に浸透させた虫除けブレスレット、静電気除去ブレスレットなども「本当に効果がある製品」と高い評価を得ています。

さらに大学との産学連携での製品開発。中国やアメリカでの展示会出展など、イノウエの、身近な高性能繊維製品。は世界からも注目されています。

「高い技術と品質の製品を安定してつくるのは、根性論では無理」と、専務の毅氏。エンジニア出身の経験を生かし、これまでは各部署の伝票発行のため社内を何往復も行き来し

て、無理。をしていた作業もシステム化。例えばパソコンが苦手な年輩社員でもハンディスキャナーを使い、製造から出荷までの工程を管理できるようにしました。

社員の余計なストレスをなくすということも、品質の一部と考えることで、より高品質、高付加価値の製品開発が実現できているのです。「経営者として、いつも思っているのは、こんな山あいの会社で働いてもらって、みんながイノウエに勤められてしあわせだと思ってもらえるかということ」と、井上社長は言い切ります。この経済環境のなかでも前年比130%以上の売上を達成し、賞与も懐を暖めるのに充分な額を出せる。それを可能にしてくれているのは社員たち。だからこそ、感謝の思いを込め、一人ひとりのがんばった点、期待していることを社長自ら手紙に書き、賞与と共に手渡すのだと言います。

「だって、心でいくら思っているでも思いは見えないでしょ」。イノウエがつくるヘアゴムと同じ。直接、見て触れて、その心を感じられることを何より大切にしている表れがここにもありました。

「静電気除去ブレス」や「虫よけブレス」など組み紐技術を活かした機能性製品も開発。類似製品は世の中に出回っているが、ユーザーに絶対にウソのない製品にするため効果を測定する機器を独自に導入するなどの努力を重ねた。

